

人間形成における「超越性」の問題についての臨床教育学的研究

— 自己変容・ケア・関係性 —

坂井 祐円

小木曾 由佳・井藤 元・柄澤 郁子

1. 研究の目的

本研究は、「心が活きる教育」の探求における4つの研究ユニットのうちの「基礎過程」に位置づくものである。すなわち、本研究においては「心が活きる教育」とは何かを思想的アプローチの下で分析的に検討し、「心が活きる教育」の前提条件となるべき理論的地盤を構築することを目指す。とりわけ本研究では、その形成に向けて顧慮すべき問題として、人間形成における「超越性」の問題を取り上げる。

現代社会においては、物事の価値基準として常に有用性・機能性が追い求められ、その結果、他者の手段化・道具化が蔓延し、意味の喪失、人間の存立基盤の根本的な揺らぎが至る所でみられることとなった。学校は、そうした指向性を加速させる装置として積極的に関与し、効率性に基づく価値観の再生産を促し、現代社会に終わることのない悪循環をもたらしている。1970年代以降の学級崩壊、不登校、いじめ問題などは、そうした負のスパイラルがもたらした当然の帰結とも考えられる。そうした状況下において、我々は、今こそ人間形成における垂直軸、すなわち「超越性」の問題を理性的・理論的に取り扱う道を模索するべきであろう。「超越性」の問題は、「かけがえのない他者（代替不可能性）」への配慮、「生きる意味」の獲得といった、人が実存的に生きようとするうえで不可欠となる要素と密接に関連している。そうした「超越性」の次元は、能力の育成といった有用性の観点からみれば全く無価値に見えるかもしれない。しかし、だからこそ有用性に基づく世界との関わりを破壊することを可能にするのであり、そのことによって、かえって意味的世界とのつながりを取り戻す体験へと我々を導くものであるとも言える。現代社会が喪失したそうした「超越性」の軸を、危険なオカルティズムとして安易に退けるのでも、また盲目的に信仰するのでもなく、客観的・理論的に分析することが必要である。その際、教育学の領域において「超越性」の問題を扱うためには、何らかのプロット（媒体構想）を用意する必要がある。そこで、本研究では、まず思想研究の体裁をとり、その上で、超越を媒体すると考えられるいくつかの基本理念—「自己変容」・「ケア」・「関係性」について検討する。思想研究の対象としては、仏教

思想・ユング・シュタイナー・メルロ＝ポンティなどを取り上げる。これらの諸思想が深く関与している「自己変容」・「ケア」・「関係性」といった問題群について、有機的・連関的・構造的に解明することを通して、超越のもつ臨床教育学的な意義を浮き彫りにしていくことが、本研究の目的である。

2. 研究活動の成果

(1) ホリスティック教育研究会における研究発表

今年度の研究活動の端緒を開いたものとして、立命館大学にて開催されたホリスティック教育研究会（2009年6月）における研究発表が挙げられる。本研究会では、「人間形成における超越性の問題についての臨床教育学的研究—自己変容・ケア・関係性」と題する部会を設け、研究分担者4名が人間形成における超越性の問題をめぐって各々、研究報告を行った。それぞれの研究発表概要は以下の通りである。

坂井は「ケアにおける「自己変容」の位置づけ」と題し、報告を行い、自己変容をめぐる問題圏を、以下の命題のうちに見定めた。

命題a：自己変容は、自己意識の内部に向かって超越に開かれることによって起こる。

命題b：自己変容は、自己と他者との関係性において、自己意識が他者意識に触発されて超越に開かれることによって起こる。

命題c：自己変容は、自己と他者との関係性において、関係性それ自体が超越に開かれることによって起こる。

この3つの命題は、自己変容という一つの事象についての〈三つの側面〉を説明していると同時に、自己変容の〈三つの段階〉を表すものであった。ここでケアという問題に関連させると、ケア論の多くは、命題aもしくは命題bを前提にしているように思われる。そこに命題cの視座を導入すると、いかなる視座がもたらされるであろうか、坂井はこうした点について、仏教思想に依拠しつつ分析を試みた。

小木曾は「心理療法における関係性——「相互性」と「対等性」をめぐって」と題し、報告を行った。心理療法において、「関係性」が単なる一要素以上のものであることは、今や衆目の認めるところである。治療関係においては、治療者もまた当事者として引きずり下ろされ、自分自身をかけてクライアントの変化に関わることになる。人間としてのクライアントを尊重し、自らも少なからぬ影響を「相互」に受けつつ、それでもなお、「非対称的」な関係を保ち続けるというあわいに、心理臨床家はいかにして立ち続けられようか。この問題を考える手がかりとして小木曾が注目したのは、C.R.ロジャーズとM.ブーバーによる対話であった。クライアントとの「対等な」人間関係をセラピーの最も重要な要素としたロジャーズと、他者との「真の関わり」について終生論じたブーバー。いずれも「関係性」の問題に深く取り組んだ二人の対話は、意外にも両

者の思想における決定的な差異を露呈した。報告において小木曾は特に、二人の「相互性」と「対等性」をめぐる議論に限定し、検討を行った。

井藤は「シュタイナー人間形成論における「自己変容」の問題」と題し、報告を行った。シュタイナーの提唱した教育実践が世界的に耳目を集める中、実践を支える当の思想はしばしば敬遠され、思想史的位置づけすらも不明確なままである。実践への関心の増大に比して、彼の思想の理論的研究は未だ十分な蓄積を持たず、両者の乖離状況は慢性化しつつあるように思われる。そうした現状に鑑み、井藤は、シュタイナー教育思想の基礎的研究として、彼のゲーテ論分析を通じて、シュタイナー人間形成論の構造的解明を試みた。シュタイナーはゲーテ文学のうちに人間の自己変容の過程を見て取り、そのうちに人智学的人間形成論と同型の構図を読み取った。従って、彼のゲーテ論を分析することで、ゲーテの世界観の枠内で、人智学的人間形成論の基本的構図を抽出することが可能になる。そうした方法により、井藤は、特にシュタイナー思想における「自己変容」の内実を明らかにした。

柄澤は、「メルロ＝ポンティにおける「脱自」と題し、研究報告を行った。自己変容の契機としての経験について考察する際、その経験において自らの「身体」、そして「感覚」が重要な要素になると考えられる。現象学であるメルロ＝ポンティの哲学においては、無論、自己変容について直接語られていることはないが、しかし、だからこそ日常的なあり方における自己変容への道筋、その第一歩についての示唆を読み取ることができると考えられる。そこでは世界や他者を「感覚」という「根源的な層」に向かつての「脱自」、つまり「自己から離れる」ということが「他へ開かれる」ということと同義として描かれているのである。柄澤は、メルロ＝ポンティの哲学におけるこの「脱自」という事態を解釈することによって、自己変容の契機としての経験における「身体」そして「感覚」について考察を試みた。

以上のようなホリスティック教育研究会における研究発表は、個人発表という体裁をとりつつも、発表者相互の連関を見出すことを目指すものだった。全体討論における、吉田敦彦氏（大阪府立大学）をはじめとしたフロアとの議論により、発表者相互に通底する地平が浮き彫りになった。また、質疑の時間を通じて、各々の研究テーマをより広い視座の下で位置づけなおすことができた。そこでの議論が、本年度の研究活動の方向性、問題の所在を明確化したのは間違いない。

（２）集中講義について

そして、前期・後期ともに集中講義という形式で「超越性」をめぐる問題の深化を図った。前期には、研究代表者である坂井の主導のもと、仏教における唯識思想について議論する中で、東洋思想における人間形成の構図を学んだ。また、関西大学より小室弘毅氏を招き、「スピリチュアリティと身体—アレクサンダー・ローエンの身体心理療法の理論から—」と題する講義を行っていただいた。身心を統合的に理解するエネルギー

論的な観点から、バイオエナジェティックスという独自の身体志向の心理療法を創始したアレクサンダー・ローエンは、我々の文化は感情やスピリチュアリティの源であるはずの「からだ」から離れつつあるという認識のもと、スピリチュアリティを抽象的、神秘主義的にならずに、身体の問題として扱っている。小室氏は本講義において、ローエンの「スピリチュアリティ」、「グレイス」という概念を検討し、生命エネルギーが身体を縦横に脈動して流れることを重視するローエンの理論の全体像を描き出した。また自我とからだの対立の問題を浮かび上がらせ、自我のコントロールを手放し、からだの不随意的働きに身をまかせることがいかに「からだ」のスピリチュアリティにつながっているのかを示した。後期は、「人間形成における「超越性」の問題」と題するシンポジウムを企画し、そこにおいて本研究課題を専門とする三人の研究者を招き、それぞれの話題提供・研究発表を通じて、「超越性」をめぐる問題について様々な観点から議論を行った。前期に引き続き小室弘毅氏（関西大学）を招聘し、「関係性の技法—身体心理療法『ハコミ・セラピー』の理論から—」と題する報告がなされた。ロン・クルツにより創始された「心と身体の相関性を重視する体験指向の心理療法」である「ハコミ・セラピー」は、東洋思想をその思想的背景の一つにもち、「マインドフルネス」という意識状態を技法体系のなかに組み入れ、またその前提として、セラピストとクライアントの関係性を重視し、「ラビング・プレゼンス（愛をもって今ここにいること）」というセラピストの独特な意識状態を技法として確立しているところにその特徴がある。小室氏は、「ハコミ・セラピー」における最重要の概念である「ラビング・プレゼンス」を関係性創出の技法ととらえて検討することにより、セラピーや教育実践の場において特に重要とされながらも具体的に語られることの少ない「人間性」や「プレゼンス」の問題について研究報告を行った。さらに川口陽徳氏（東京大学大学院）により「わざ」の継承を「三者関係」で捉える試み—宮大工の師弟関係を手がかりにして—と題する報告がなされた。本報告では、師弟が生活を共にするなかで「知」を受け継いできた実践共同体である「わざ」の世界の継承についてレクチャーがなされた。本発表では、まず弟子の入門以前の、「師匠の実践の関係」の整理がなされ、しかる後にその「実践の関係」と「弟子」の関係が三者関係として構造化された。それによって、「関係に関係する学び」である、師匠の「『わざ』の行使の関係まるごと」を見習うという継承の新たな様相が描き出され、この三者関係をめぐる議論を通して、「教える—学ぶ」関係ではない、「実践者同士」という師弟の関係性が浮き彫りにされた。ここから、「師弟関係」と「実践共同体」の接点が明示され、師弟関係自体が「わざ」の実践であるという結論が示された。また、ホリスティック教育、スピリチュアリティ、東洋哲学、対人援助学などを専門に幅広く活躍されている立命館大学文学部教授中川吉晴氏に、「人間形成をめぐる「超越性」の問題」と題する講演をしていただいた。中川氏の講演を通じて、本年度研究プロジェクトの位置づけ及び意義を再確認することができた。

(3) 論文集について

また、本年度研究活動の集大成として『人間形成における「超越性」の問題』と題する論文集（北斗プリント）を発刊する（2010年3月発行予定）。執筆者は本プロジェクトの研究分担者4名に、小室弘毅（関西大学）、川口陽徳（東京大学大学院）、福若真人（大阪府立大学大学院）、守屋治代（大阪府立大学大学院）の4名を加えた計8名である。そこでは、「超越性」の問題をめぐって、執筆者がそれぞれ、「自己変容」、「ケア」、「関係性」の観点から、各々の具体的な研究課題に沿ったテーマを論じた。

3. 思想研究の成果

(1) 仏教思想研究からの考察

研究代表者である坂井は、「自己変容」・「ケア」・「関係性」の総合的な検討を課題として、東洋思想—とりわけ仏教思想の観点から考察を行った。本研究ではまず、仏教思想を教学研究としてではなく、人間形成論として捉えることによって、とくに現代ケア論との比較や接合を可能にした。仏教思想が提起する菩薩の理念は、自身が悟りの智慧を得ること、そして、他者に対して慈悲の実践をすること、の二つのあり方を理想とする。仏教用語が散りばめられているが、概念の置換を試みれば、悟りの智慧を得るとは根本的な「自己変容」のことであり、慈悲の実践とは広義における「ケア」と言ってよいであろう。したがって、悟りの智慧をいかに得るのかという問いは「自己変容」論として、また、慈悲の実践はいかにあるのかという問いは「ケア」論として扱うことができるのである。さて、そうした場合、どちらの問いにも「縁起」と「空」という超越概念がキータームとなる。「縁起」とは、事物が様々につながり合って起こることをいい、「関係性」の問題を捉えている。「空」とは、形なき根源的生命のはたらきであり、「超越性」そのものであろう。このとき、「縁起」と「空」とが妨げ合わずに融和する世界を、究極の真理として仏教は提示するが、ここから「関係性」にはたらく「超越」という構図が、ケア論の展開として導き出されることになる。そして、この構図において「自己変容」が成立し、さらには「ケア」の本質が深められることになる。しかも、この構図はケアする主体の自覚的様態において感得されることで、実践性を高めることにもなるのである。また、仏教思想では慈悲について3つの位相があることを分析するが、この分析を通して、ケアする主体の自覚的様態に応じて、ケアされる側の「自己変容」の質的な位相も異なってくることを明らかにしている。以上のような考察をベースにして、仏教的ケア論の構築を試み、そして、現代ケア論の最も純化した形態であるスピリチュアルケアについての再検討を行った。その研究成果は、投稿論文4本、学会発表4回、その他業績2点として結実することになった。以下に、その一端として、投稿論文の成果を挙げることにする。①「仏教はケアに向いている思想なのか—「梵天勧請」説話を

めぐって一』『臨床教育人間学』第 10 号、京都大学大学院教育学研究科臨床教育学講座、2009。②「魂の癒しといのちの根源性—スピリチュアルケア研究会の歩みを通して—」『南山宗教文化研究所報』第 19 号、南山大学宗教文化研究所、2009。③「理念としてのスピリチュアルケア—ケアの場にはたらくスピリチュアリティの自覚的様態—」『人間性心理学研究』、日本人間性心理学会、(査読中)。④「仏教思想からケアを考える—ケアにおける自己変容とケアする主体—」『人間形成における「超越性」の問題—自己変容・ケア・関係性』、京都大学大学院教育学研究科「心が活きる教育のための国際的拠点」研究開発コロキウム研究成果報告書、2010。その他の業績としては、望月昭他編『対人援助学辞典』(晃洋書房、2009)での「仏教カウンセリング」、「スピリチュアルケア」の 2 項目の執筆を通して、研究課題を深めることができた。また、今年度は、上越教育大学の「いのち教育ゼミナール」(得丸定子研究室主催)において特別講義を依頼されたが、ここではケア論の重要な概念である「共感」について取り上げ、これを「超越性」の観点から検討することを試みることで、大学教育の場にも研究成果を提示することができた。

(2) ユング研究からの考察

副代表者である小木曾は、C.G.ユングの「個性化」論における「関係性」の問題について検討を行った。小木曾は、「個性化」論においてしばしば交錯する「他者性」の意味合いを、便宜的に「社会的現実としての具体的な他者」と「永遠に把捉することができないものとしての絶対的異他」の二つに分類し、それぞれに対応した以下の二つの切り口を課題に考察を行った。すなわち、①ユングの転移論に他者・関係論としての意義を見出し、現代思想の他の思想家(主に M.ブーバーおよび C.R.ロジャーズ)の主張に照らして考察すること、②ユング思想の構築に W.ジェイムズのプラグマティズム哲学が大きな影響を与えたことを示し、両者の理論を比較する中で、彼らの思想において「異他なるもの」「超越的なもの」がいかに取り扱われたかを検討すること、の二点である。こうした多角的な考察を経て、最終的に「個性化」論の他者性の問題に関する理論モデルを構築し、「関係性」の構造を捉えるひとつの枠組みとして提示することを目指した。その研究成果は、以下の 3 点の業績のうちに結実した。①ホリスティック教育研究会(於：立命館大学)において、「心理療法における関係性—「相互性」と「対等性」をめぐって」と題し、研究報告を行った。心理療法において、人間としてのクライアントを尊重し、自らも相互に影響を受けつつ、それでもなお「非対称性」を保ち続けるという「関係性」はいかに成立しうるのだろうか。この問題を、ユング＝ブーバーの対話をもとに、「相互性」と「対等性」をめぐる議論に焦点化して検討を行った。

②また、第 68 回日本教育学会(於：東京大学)では、「C.G.ユング「個性化」論における関係性の側面—『転移の心理学』分析を通して」と題し、研究報告を行った。ユングの「個性化」論は、西洋近代的な自我発達のモデルを相対化し、老いや死までを含

めた人生全体の問題を射程に捉えた点で大きく評価される反面、他者性への視点を欠いているとして、様々な学問分野からの批判を受けてきた。しかし、ユングの意図した「個性化」は、本当に現実的な他者を度外視した、単純に内的な心理過程であったのだろうか。ある個人の「個性化」に他者はどのような影響を与えうるか。こうした観点から、「個性化」論を問い直す必要があると思われる。そこで本報告では、ユングの転移論、とりわけ『転移の心理学』（1946）を取り上げ、「個性化」論を関係性の視点から読み直し、諸批判に対するひとつの回答可能性を模索した。③さらに、「異他なるもの」との「関係」という観点から、修士論文「個性化とプラグマティズム—ジェイムズ思想によるユング心理学再考」を執筆した。そこでは、ユング「個性化」論をジェイムズのプラグマティズム哲学の観点から読み直すことを試みた。この作業を通じて、ユングの「個性化」論は、「個」が「普遍」との間で取り結ぶ垂直的な関係性でもあることが明らかになった。（尚、③の業績については、来年度、学会発表、投稿論文という形でその成果を発表する予定である。）

（3）シュタイナー研究からの考察

井藤は、人間形成における「超越性」の地平をめぐって、とりわけ（研究題目の副題に掲げられた3つのテーマのうち）「自己変容」の問題の検討を試みた。その際に、本研究が問題にしたのは、人間形成において、そもそも何故、自己の変容が求められるのか、「自己変容」は我々に何をもたらすのか、といった問いであった。こうした問題の検討にあたって、井藤が主たる考察対象に選んだのが、ルドルフ・シュタイナーの人間形成論である。シュタイナーにとって、人間の「自己変容」は、彼の目指す人間像の確立にとって不可欠の要因となる。そこで、予め問いを限定し、上記問いを、シュタイナー人間形成論において「自己変容」はいかに位置づくか、「自己変容」の果てに何がもたらされるのかへの問いに置換し、その解明を試みた。シュタイナーの人間形成論において、「自己変容」は「自由」獲得のための必要条件であり、「自己変容」は決して、それを経ずにおけるような何ものかではない。彼にとって、（そしてシュタイナー教育にとって）「自由」の獲得は達成されるべき最重要課題であるが、「自己変容」は、それを可能にする必須要件なのである。その問題を解き明かす上で、井藤は、特にシュタイナーのゲーテ論に着目した。本年度の研究活動を通じて、投稿論文4本、学会発表5回、その他業績2点という成果を挙げることができたが、その成果の一端を以下に示すこととしたい。①「シュタイナーの『ファウスト』論—『ファウスト』解釈に秘められた「自由」の哲学—」、『京都大学大学院教育学研究科紀要』第56号、京都大学大学院教育学研究科、2010。②「ゲーテ『ファウスト』の神智学的解明—シュタイナー人間形成論の縮図」、『ホリスティック教育研究』第13号、ホリスティック教育協会、2010。③「シュタイナーとゲーテ『メールヒェン』—『メールヒェン』解釈に秘匿されたシュタイナーの人間形成論」、『臨床教育人間学』第10号、京都大学大学院教育学研究科臨床教育

学講座、2009。④「『自由』獲得の前提としての『自己変容』—シュタイナー人間形成論における『自由』の内実」、『人間形成における『超越性』の問題—自己変容・ケア・関係性』、京都大学大学院教育学研究科「心が活きる教育のための国際的拠点」研究開発コロキウム研究成果報告書、2010。4つの論文では、それぞれシュタイナーのゲーテ論分析を通じて、シュタイナー自身の思想構図を浮き彫りにさせ、「自由」獲得の前提としての「自己変容」の内実を明らかにした。また、今年度は、上記テーマを学会発表という形でも公表したのだが、そうした一連の発表を通じて本研究内容が深化されることとなった。とりわけ、ゲーテ研究者を中心として開催されている「ゲーテ自然科学の集い」での研究報告は極めて貴重な体験となった。（「R.シュタイナーのゲーテ論—『メーメルヒェン』・『ファウスト』解釈にみられる人智学的人間観—」、「ゲーテ自然科学の集い」、京都例会、於：立命館大学、2009。）本報告を通じて独文学の研究者達から多くの示唆を得ることができた。また、「自己変容」以外の問題（「ケア」、「関係性」）に関しても、望月昭他編『対人援助学キーワード集』（晃洋書房、2009）において「ケアリング」、「シュタイナーの教育と福祉」、「スクールホーム」の3項目を執筆することで、研究成果を挙げることができた。さらには、「自己変容」をめぐる、教育実践への配視の必要性から、日本教育学会ラウンドテーブル（小松佳代子、西島央、井藤元、川口陽徳他「芸術教科と芸術体験のはざま」）での芸術分野の研究者との共同発表を通じて、実践的領域との交流を図った。

（４）メルロ＝ポンティ研究からの考察

柄澤は、人間形成における「超越性」の問題において主に「自己変容」を主題として検討を試みた。参照したのはモーリス・メルロ＝ポンティの哲学である。特にメルロ＝ポンティが述べる独特の「身体」においてどのように「意味」が生成されるのかという「意味」生成の構造をその手がかりとした。その「身体」においては「自己」から離れ、世界へと身を開くことによって「感覚」することの層である「根源的な層」へと向かうというベクトルと、その層からまた「自己」へと立ち戻るというベクトルが考えられているが、この二つの方向への「超越」において「意味」がとどまることなく生成する、という構造がその「意味」生成の構造である。特にその構造の前半部、つまり「自己」から離れることによって世界へと身を開くというベクトルについて身体実践と結びつけて考察を深めた成果の一つが、2009年度ホリスティック教育研究大会(2009年6月21日)における「メルロ＝ポンティにおける「脱自」——自己変容における身体、感覚と関係性についての考察——」というテーマでの個人発表となった。当発表においては特に野口整体における「愉気」という事態をメルロ＝ポンティの「脱自」にかかわる言葉によって読み解くという方法によって、身体、感覚と自己変容——「意味」の生成——とのつながりについて考察を行った。ここでは「愉気」との関連においてメルロ＝ポンティの「身体」概念、特に間身体性につながる共存の身体に注目することから、自己変容と他者との関係性についても考察が及ぶこ

ととなった。続いて日本教育学会第 68 回大会（2009 年 8 月 29 日）において「「違和感」についての考察——メルロ＝ポンティにおける「作動的指向性」の検討から——」という題目で個人発表を行った。当発表においてはやはり身体、感覚と自己変容というところに焦点をあてつつ、「根源的な層」から「意味」があらわれでてくるそのベクトルとしての「作動的指向性」を検討した。さらにまた人間形成の「超越性」に深く関わるこの「意味」—sens—の生成の次元の深みそのものについて考察を深めていった。そして当発表においてやはりもう一度メルロ＝ポンティの「意味」、特に sens という概念を整理し直すということが課題として浮かび上がってきた。そこで『人間形成における「超越性」の問題—自己変容・ケア・関係性』、京都大学大学院教育学研究科「心が活きる教育のための国際的拠点」研究開発コロキウム研究成果報告書（2010 年 3 月発行予定）掲載の論文「メルロ＝ポンティにおける「意味(sens)」の生成——『知覚の現象学』の検討を中心に——」において、改めてメルロ＝ポンティの「意味(sens)」の考察を行った。

4. まとめ

研究分担者による個々の思想研究における考察の深まり、学会での研究成果の発表、集中講義の開催、および他大学との交流・合同ゼミなどにおける活発な議論を通して、本研究の課題である人間形成における「超越性」の問題について、多角的・包括的に究明することができた。本研究において検討した超越を媒体とする基本理念—「自己変容」・「ケア」・「関係性」の問題は、仏教思想、ユング、シュタイナー、メルロ＝ポンティなどの思想研究の成果により、次に示すような 4 つの共通了解に集約することができるだろう。①自己変容は、個人レベルでの「自由」の獲得につながる前提となること。②自己変容は、世界へ「身体性」を開示し、再び自己へと立ち戻るという「意味」生成の構造において可能となること。③自己変容は、「他者」との関係性を形成し、そこに「相互性」、「対等性」、「非対称性」といった新たな問題を生じること。④それぞれの自己変容の展開は、ケアという実践形式のもとで構築される人間形成の必須要件であり、同時にケアする主体の自覚的様態であること。これら 4 つの共通了解を通して見えてきた今後の課題として、以下に示す 3 つの問題を挙げたいと思う。第一は、＜超越の構造＞の問題である。思想研究の中で取り上げた各々の系譜は、それぞれにユニークな発想のもとで「超越性」に迫っており、そうした思想的契機のもとで、超越についての基本構造を提起している。たとえば、シュタイナーでは超感覚世界と感覚世界との循環として、メルロ＝ポンティでは脱自から根源的な層へそしてまた自己へと立ち戻る往還運動として、ユングでは個性化過程に見られる個と普遍の関係性として、仏教では悟りの転換を可能にする縁起と空のはたらきとして、描かれている。これらの構造から抽出されるのは、＜自己＞と＜超越＞との二重性であろう。超越という言葉が自己ならざるもの

を意味していると考えれば、この二重性は当然の帰結である。そして、このことは、実のところ、自己変容が本質的に自己超越の力動的な展開であることを示唆していると言えよう。第二は、＜超越の生成＞の問題である。超越の基本構造を捉えることによって、そこから、「超越性」の垂直軸が人間形成に関わるいくつかの重要な要素を生成することが明らかとなる。シュタイナーでは、これを真に道徳的な自由意思を生きること、すなわち「自由」の獲得であると位置づけている。そして、メルロ＝ポンティでは、世界への「身体性」の開示であり、その身体を基点として立ち現われる「意味」の生成であると言えよう。「身体性」において不断に生成する「意味」は、ふたたび脱自によって他者へと開かれる発展的契機ともなる。メルロ＝ポンティのいう他者への開けは、仏教思想の根本理念の一つである慈悲の問題に通じている。慈悲とは、悟りの智慧に基づく他者への行為的関与であり、まさに超越の生成を如実に示している。このような超越の生成に関わる諸要素は、超越のはたらきが人間形成において不可欠のリアリティであることを例証するものであると言えよう。第三は、＜超越の遍在性＞の問題である。超越の生成は、他者との関係性を生み出す発露となるが、その最も具体的な展開がケアである。ケアの関係性においては、「相互性」、「対等性」、「非対象性」などの基本的なパターンが見られ、こうした関係性のヴァリエーションからケアの方向づけがなされる。このとき、ケアの関係性のもとで、ケアする側に、超越の恩寵的なはたらきを感じ取ること、そして、超越をそのつど確証していくことが求められるとする、ブーバーの指摘は興味深い。この指摘は、超越が特殊な場面でのみ機能しているのではなく、むしろ日常の中に遍在的に関わっていることを示唆していよう。このことを端的に提示したのは、おそらくユングの「共時性」の概念であると思われるが、仏教においては、「真如随縁」という考え方が超越の遍在性の問題を扱っている。これは「空」が「縁起」の世界にはたらき出すこと、いわば、関係性の中に遍在的に関与する超越の展開を表している。仏教ではさらに、超越の遍在性を感得するのは、超越の自覚的様態においてであることを指摘している。すなわち、超越の遍在性は、同時に主体性の問題を喚起させるのである。それはまた、自己変容の深まりを促すものであり、自己変容の問題に再び立ち戻ると言えよう。3つの問題は、「超越性」を思想的に位置づけていくうえで重要な鍵概念となろう。これらの課題は、今後の展望として、「超越性」と主体との関わり、さらには他者との共同性や歴史性の問題についての考察を開くものと思われる。我が国の教育学においては、現在、「超越性」の問題が中心的に論じられる機会はほとんどない。そうした現状において、特定の宗教、宗派の教理学からの言説ではなく、教育学という学問領域において、「知」と「信」の架橋を目指した活動を展開することの意義は大きいであろう。その意味で、教育学における「超越性」の探究はまだ始まったばかりである。本研究のさらなる発展に向けて、研鑽を深めていきたい。